

未来は自分がつくるもの

茗溪塾塾長 宇野 雅春

嵐のように中学受験が過ぎていきました。受験というのは誰もが必死な分、思うようにはいかない事がたくさん出てきます。不合格にめげず最後まで頑張り抜く生徒の姿にも、合格よりも大切なものを感じることがあります。合格の喜びはつかの間、次はもっと高いハードルが待っています。子どもたちは、この差し迫った時代をどう生き抜いていけばいいのだろうか、ふと考えたりします。

2011年度の就職戦線が動き出して、一番ビックリしたのが、塾の2011年度新卒者向け就職説明会への参加人数の多さです。去年までは多くても20名くらい、少ないときは4～5名という状況だったのに、今年のスタートは1回目にいきなり46名が集まり2回目は申込段階で50名を超え、定員締切で対応する状況となりました。塾業界に関心が高まっているのは事実だとおもいますが、とにかくどこでも良いから「内定」を取りたいという学生の焦りも感じてしまいます。たくさん内定を取って、一番条件の良いところに決めようというこれまでの学生のあり方に、私の方はちょっと疑問を感じています。受験を勝ち抜いた最後のつめの所で、今度は就職という人生を決定づける出来事があるわけです。受験も就職も、入り口の結果より、「その次」を考えてほしい気がします。

採用する側は、一緒に仕事を発展させていく意欲のある人材が欲しいのですが、仕事ができるかどうかもわからないのに、条件を吟味している採用される側にはとまどいを覚えますし、「仕事」という厳しさを全く考えず、ありもしない理想を尺度に不満ばかりを唱える一部の傾向には非常にがっかりします。不況の中では特に人材を育てる余裕がないということですから、条件探しや、自分にあった仕事探しの姿勢では内定はとれないと思います。企業も余裕のない不況下であって、選考はより厳しくなるはずですが。

そうした就職の状況を思うと、「受験」の意味も自ずから変わってきます。「受験」は自分の未来にとっては重要な要素です。ただし、ここでも「条件の良さ」だけを考えてその学校に入れば何もかもうまくいくという甘い発想にとりつかれるのは、やむを得ない事かもしれませんが大きな勘違いです。どんなところでもその場なりの努力が要求されますし、どこに行ったか！よりも進学した先でいかに学習するのかが大切ははずです。

入りたい学校にいけなかったからとすねてみても、何も始まらないというだけでなく、どの学校に行っても自分の方向性がしっかりしていれば、自分の未来は切り開けるということです。そう思うとむしろ「合格」という事実よりも、そこに至るプロセスが大切に思えてきます。つまり、自分に合う仕事を探すというより自分を仕事に合わせる努力をしつつ、そこに自分なりの目標を設定しやり遂げていくこと、それが一番現実的ですし、多分次の「生きがい」をつくるということにつながるはずですが。未来は、与えられるのではなく「自分が作る」という姿勢が、この厳しい時代を生きて行くにはもしかしたら、不可欠なのではないか。現状の中の今ある場所と、自分のやりたいことを結びつける努力が必要ということ。こうなれない、ああなれないと愚痴るより、こうしたい、ああしたいと考え行動することで、どんな場所にもチャンスはあると思えるのです。どんな場所にも、輝いている人はいるし、どんな恵まれた場所にも不幸な人はいます。不幸は多分自分でつくっているに過ぎないようにも思えます。

「受験勉強」と「受験」のプロセスの中にたくさんのヒントがあるはずですが。結果より受験勉強の中で大きく成長して次のステップに進めればそれが一番良いことではないか。受験の結果を次に本当に生かせるのかどうかで、この時代を生きていく大きな力を得られるということ。うまくいかなかったことも、本当の意味で自分の責任の中で反省すれば、次の力に変えられるということです。

いつの間にか、新しい学年がスタートしています。次の学年は次の学年で、また最初からやり直し！という感じです。でも振り返る中から、自分自身は、更に一步でもいいから前に進みたいと考えています。